

萩 現地審査報告書（公開版）

【日程】2016年（平成28年）8月7日～9日

【現地審査員】

宮原 育子（日本ジオパーク委員会）

平田 大二（日本ジオパーク委員会）

白井 孝明（室戸ジオパーク）

【現地対応者】

野村 興兒（萩ジオパーク構想推進協議会会長／萩市長）、中村 和末（萩ジオパーク構想推進協議会副会長／豊ケ淵交流事業実行委員会会長）、木村 靖枝（萩ジオパーク構想推進協議会副会長／まちじゅう博物館推進委員会笠山部会長）、西村 武正（萩ジオパーク構想推進協議会副会長／まちじゅう博物館推進委員会須佐部会長）、白神 崇（萩ジオパーク構想推進協議会監事／まちじゅう博物館推進委員会福栄部会長）、原田 憲一（学術顧問／至誠館大学学長）、金折 裕司（学術顧問）、鶴谷 保（学術顧問）、和田 眞教（萩市副市長）、西島 孝一（萩市議会議長）、松浦 好洋（萩市まちじゅう博物館推進部長）、福島 康行（萩ジオパーク構想推進協議会事務局長）、伊藤 靖子（萩ジオパーク構想推進協議会事務局）、景由 孝雄（萩ジオパーク構想推進協議会事務局）、峠山 桂子（萩ジオパーク構想推進協議会事務局）、樋口 尚樹（萩ジオパーク構想推進協議会支援員）、田中 裕（萩博物館長）、清水 満幸（萩博物館副館長）、堀 成夫（萩博物館主任研究員）、田中 慎二（萩市まちじゅう博物館推進課長）、須子 義久（NPO 萩まちじゅう博物館理事長）、田邊 信（NPO 萩まちじゅう博物館副理事長）、山本明日美（NPO 萩まちじゅう博物館専門員）、吉村龍一朗（まちじゅう博物館推進委員会堀内部会長）、小茅 稔（まちじゅう博物館推進委員会浜崎部会長）、原田 利正（まちじゅう博物館推進委員会旧松本村部会長）、三好 健二（まちじゅう博物館推進委員会土原部会長）、矢田 征男（まちじゅう博物館推進委員会旭部会）、大田 剛志（まちじゅう博物館推進委員会むつみ部会）、中村 哲夫（萩市教育委員会教育長）、以下組織名 萩温泉旅館協同組合、萩ケーブルネットワーク（株）、萩市観光協会、はぎ時事新聞、萩ユネスコ協会会長、山口県漁協はぎ統括支店、山口県市町村課、山口県萩県民局、山口市観光交流課、阿武町教育委員会事務局、NPO 萩観光ガイド協会 5名、越ヶ浜小学校（校長、教頭、5年担任、4年担任、ふれあい担任、5年生12名、4年生8名）、越ヶ浜小学校運営審議委員会 3名、ジオな教育委員会 3名、（一社）須佐おもてなし協会 3名、須佐元気なまちづくりネット、豊ケ淵交流事業実行委員会 5名、弥富龍神太鼓 10名、萩市地域おこし協力隊 2名、報道関係 9社

【見学地点・行程】

1. 8/7：事務局ヒアリング
2. 8/8：笠山とその周辺ジオサイト（笠山山頂展望台、風穴・明神池）、教育関係者ヒアリング、須佐湾・高山ジオサイト（みこと館、須佐湾遊覧船）、地域振興団体ヒアリング、龍が通った道ジオサイト（イラオ火山灰層観察施設、猿屋の滝）、住民ヒアリング
3. 8/9：明治日本の産業革命遺産ジオサイト（萩城下町）、萩博物館、まちじゅう博物館ヒアリング、会長ヒアリング、萩ジオパーク構想推進協議会ヒアリング、講評

【現地審査のまとめ】

1) 萩ジオパーク構想地域の概要

萩ジオパーク構想地域は、山口県萩市と阿武町の区域全域に、山口市阿東地域の一部（山口市の区域のうち長門峡県立自然公園に含まれる部分）を加えた地域である。大陸縁辺部における様々な様式の火成活動が生み出した地形と特有の生態系が広がっている。歴史の町と知られる萩であるが、歴史的な町並みが残る城下町は、火山群の活動によって生まれた阿武川の河口に形成された三角州にあり、近代日本の発展を支えた維新の町であるとともに、氾濫を繰り返す阿武川と共に生きる知恵のつまった町である。

地域住民主体の活動が非常に活発なことが最大の特徴といえる。学校教育では学校と地域住民が連携して故郷教育に取り組み、観光面では既存のボランティアガイド活動にジオパーク的視点を積極的に取り入れているほか、これまで観光開発がされていなかった内陸部でもジオパーク活動による新たな町おこしが起こり活気づいている。住民主体のボトムアップ型のジオパーク活動はすでに完成されつつあり、全国のジオパークの模範地域になり得る。

一方で、ジオパーク活動が既存のまちづくり構想の一部として位置づけられていることで可視性が弱い点や、事務局や地質学分野の専門的な人材が十分でないといった点が課題としてあげられる。

2) ジオサイトと保全

大陸東縁部での大規模噴火活動、日本海形成に伴う斑レイ岩の貫入、約 40 の単成火山からなる阿武火山群など白亜紀から第四紀にかけての大陸縁辺部における様々な様式の火成活動の痕跡が残っており、またそれによって育まれた特有の生態系と人々の歴史・文化に触れられる場所として「長門峡と佐々並カルデラ」、「須佐湾・高山」、「笠山とその周辺」、「龍が通った道」、「明治日本の産業革命遺産」を主要なジオサイトとしている。ジオサイト内には更に細かく多数の「ジオポイント」が設定されているが、日本ジオパークではジオサイトやジオポイントの概念について議論がなされており、今後サイトの設定については再検討が必須である。

ジオサイトのうち、長門峡が国の名勝、須佐湾が国の名勝および天然記念物に指定されており法的に保全されている。また笠山や須佐湾、高山をはじめとした海岸地域は北長門海岸国立公園、長門峡は県立自然公園に含まれており、山口県と萩市、山口市、阿武町が連携して保全にあたっている。萩城下町については「浜崎伝統的建造物群保存地区」に選定されているほか、2015 年には「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録されている。「龍が通った道」は他のジオサイトと違い、ジオパーク関連活動によって新たに開発が進められている地域である。2009 年には、露頭の一部に火山灰層観察施設が新たに建てられたほか、柱状節理を広範囲で観察できる「猿屋の滝」は 2015 年に新たに市指定の名勝および天然記念物になっている。以上のように大半のジオサイトが何らかの法的な保全措置が施されている。

さらには、毎年 7 月の市民総参加による一斉清掃や、イラオ火山灰層観察施設を放課後子ども教室や高校のクラブ活動の一環で子どもたちがクリーニングする、草刈りなどの露頭保全活動を住民が日常的に行うなど、地域住民の手による保全活動の意識も高い。

3) 教育・研究活動

学校教育を始めとした地域の子どもに対するふるさと教育が非常に進んだ地域である。萩市教育委員会には2015年に「ジオな教育推進委員会」が設置され、理科や社会の教員が選出されてジオパークを活用した教材開発を進めている。また全ての小中学校でコミュニティ・スクールが導入されているほか、放課後子ども教室など、地域住民が学校教育に携わる仕組みができている。地域の自然・歴史・文化を地域の人から学び、萩に対する誇りを育てることを目指した取り組みが盛んである。

地質学的な研究は、山口大学や山口地学会を中心に進められてきた。特に2000年代以降は山口大学の永尾隆志氏が研究と教育普及活動に精力的に取り組み、地域住民を巻き込んだ活動が活発化したことがジオパーク活動につながった。萩ジオパーク構想のほぼ全域で永尾氏による講演や学習会が催されてきたことが、現在の活発な住民活動の基盤となっている。しかしながら、永尾氏が2016年4月に逝去されたために地質分野の専門家が不在であることや、「龍の通った道」などの新しい開発地域において学術論文が殆どないことが大きな課題である。

4) 管理組織・運営体制

萩ジオパーク構想推進協議会は、萩市長を会長とし、NPO、教育機関、報道機関、商工・観光関係団体、農漁協等各種団体、山口県、萩市教育委員会、萩市が参画している。山口県はジオパーク活動を積極的に支援しており、県庁内でも関連した展示を催すといった取り組みもしている。また、阿武町と山口市はオブザーバー会員として参画している。萩市議会は推進協議会の会員ではないが、国内の複数のジオパークに視察に赴いたり、議会でジオパークに関わる予算増額の要望を出したりと、推進協議会との関係は良好である。

同協議会事務局および萩市ジオパーク推進課は、臨時職員1名を含めた4名体制である。今年度から1名増員されたが、まだ人員が十分とは言えないのが現状である。事務局員1名が新たに山口大学で地学を学び修士号を取得するなど、各職員が学術知識の向上に取り組んでいるが、専門員はおらず現在募集中である。

萩市では「萩まちじゅう博物館構想」をまちづくりの機軸とし、地域の歴史・文化・自然を住民の手で発掘し、保存・継承、観光に活かす取り組みを進めている。萩ジオパーク構想は、自然の分野を推進する活動として位置づけられている。萩まちじゅう博物館構想を推進する「NPO 萩まちじゅう博物館」は萩ジオパーク構想推進協議会の会員である。地域住民が自ら活動を起こす取り組みが盛んな一方で、ジオパークが萩まちじゅう博物館の活動の一部にとどまり可視性が低いことは改善する必要がある。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズムについて

NPO 萩観光ガイド協会、(一社) 須佐おもてなし協会、豊ヶ淵交流事業実行委員会など、各地域にガイドやツーリズムを推進する団体があり、地域住民がボランティアベースでジオツーリズム活動に取り組んでいる。萩城下町などの市街地では既存の歴史観光に地質や地形の情報を取り入れることで多様化する観光ニーズに答えたり、参加者の新たな興味を生むといった効果が出始めている。須佐湾では、漁船で地元ボランティアガイドと巡るクルージングがあり、須佐ホルンフェルスを始めとした、堆積岩と貫入岩が作り出した独特の景観を楽しむことが

できる。ストロンボリ式噴火を記録した火山灰層の大規模露頭や溶岩流が見られる内陸部の弥富地区では、ジオパーク活動によって新たに注目され始めた地域であり、地域住民の熱心なガイド活動に加えて、火山活動をテーマにした舞踊や太鼓はジオパークエリア内外で人気の演目になっている。既存の観光活動から新しい取り組みまで、各地域の地域住民が主体的に取り組んでいる点は非常に評価できる。ジオパークという新しい切り口で横の繋がりを強化することで、萩全体の一体感を高めていくことも期待される。

案内板や解説板は、設置箇所や内容について現在検討中で、これからの取り組みになるが、世界遺産や歴史的な町並みなどの既存の案内・解説板との兼ね合いを十分に考慮する必要がある。

6) 国際対応

ジオパークに関するパンフレットや看板類は外国語表記がないが、その他の観光パンフレット、看板類は外国語表記や外国語版がある場合が多い。伝統的な町並みや世界遺産といった歴史資源は外国人観光客の評判もよく、外国人を乗せた大型客船の寄港（萩港）も近年増加している。NPO 萩まちじゅう博物館には外国語ガイド班があり、英語観光マップの制作などが進められている。ジオパークのパンフレットや看板、あるいはガイドについても同様に国際対応を進めていくことが望まれる。

7) 防災・防災教育

2013年7月28日の豪雨災害で田万川地域、須佐地域、山口市阿東地域が大きな被害を受けたこともジオパークを目指す理由のひとつである。災害からの復旧・復興に多くの市民ボランティアが携わり、その後は防災という観点で活動が引き継がれている。城下町も三角州につくられた町で、古くから阿武川の氾濫との戦いの歴史が古文書に詳細に記録されている。水害と隣り合わせの地域にあることを学び、そうした地域で暮らしていくための知恵を継承する活動が学校教育にも反映されている。阿武火山群を構成する単成火山は活火山であり、また、萩北断層のような活断層の存在も知られている。地域の特性を学び、ジオハザードに対処していくことも重要な目的のひとつと認識して、ジオパーク活動が進められている地域といえる。

8) 他地域との交流およびJGNへの貢献の展望

JGN全国大会や、中四国近畿ブロックのキャンペーンにもガイドや事務局スタッフが積極的に参加して、他地域との交流を図っている。また、全国大会においては分科会にてジオパークの在り方についてガイドが積極的に意見を述べるなど、日本のジオパークをより良い方向へ高めようという意識も強い。*Mine*秋吉台ジオパークとは隣接しており、今後は共同でジオツアーを企画するなどの展開を検討中である。

8) 結論

[ジオパークとして優れていると思われる点]

- ・海岸から山間部まで、また地質・地形や生態系のみならず城下町といった歴史・文化までジオパーク的資源の多様性が高い。
- ・ガイド活動やおたから発掘作業を中心に市民活動が全域で組織的に展開されている。

- ・ジオパーク活動をきっかけに新たなジオサイトを住民の手で開発している（弥富地区）。
- ・小中学校で自然科学や防災について教育委員会、学校、住民が連携した教育が盛んである。

[課題があると思われる点]

- ・拠点施設のジオパークとしての整備が弱く、可視性に問題がある。
- ・案内・解説板の整備。
- ・学術的な支援をする人材や研究者の充実。
- ・菘まちじゅう博物館の活動とジオパークの活動のすみ分け。

以上